

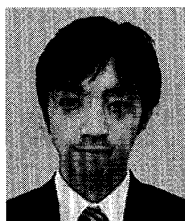
城戸奨励賞を受賞して

予習が授業理解に与える影響とそのプロセスの検討
—学習観の個人差に注目して—

『教育心理学研究』第56巻第2号)

篠ヶ谷 圭太

(東京大学大学院教育学研究科)



このたびは、城戸奨励賞という名誉ある賞をいただき、大変光栄に思っております。

本研究の背景

勉強をしていく上で、予習や復習が大切だということは多くの方が持っている認識だと思いますが、予習は復習に比べ、あまり行われていないといわれています。恥ずかしながら、自分自身も学生時代を振り返ってみて、そこまで予習を重視していなかったように思います。にもかかわらず、当たり前のように「大切だ」といわれている予習には一体どのような効果があるのでしょうか。自分の研究はそんな漠然とした疑問から始まりました。

予習が授業理解を深めることは直感的にわかります。しかし、どういった深まり方をするのでしょうか。特に私が気になったのが予習の効果の個人差です。予習を行わせればどの生徒にも一様に効果が見られるのでしょうか。予習をしても効果が得られない生徒がいるのであれば、そうした生徒に予習してくるよう指導しても意味はありません。こうしたことが気になって先行研究を調べてみたのですが、明確な示唆を得ることはできませんでした。そこで本研究に着手するに至りました。

本研究の概要

文章理解を扱った先行研究の知見から考えると、教科書を読んで予習をしておけば、授業では予習で得られる知識同士の関連の理解が深まることが示唆されます。例えば歴史学習では、教科書には歴史的事実が記述されていますが、そうした知識同士のつながり、すなわち歴史の背景因果については詳細に記述されておらず、授業の

中で扱われることになります。このような授業の場合には、教科書を読んで予習しておく、授業では教科書に記述されている史実の背景因果の理解が促進されるものと考えられます。

しかし、こうした予習の効果はすべての生徒に一樣に見られるのでしょうか。そこで、私が予習の効果の個人差要因として注目したのが、学習観という、学習者が学習に対して持っている信念です。学習において知識のつながりの理解を重視する「意味理解志向」の高い生徒であれば、予習をしておくことで、授業ではその背景因果に注意が向き、理解が深まるものと考えられますが、意味理解志向の低い学習者の場合、そのような予習の効果は見られないのではないのでしょうか。

このような仮説を検証するため、私は夏休みを利用して中学生を大学に集め、歴史の実験授業を行いました。教師による解説授業を受ける前に教科書を読んでおく群(予習群)、教科書を読んだ上で質問を生成しておく群(質問生成予習群)、授業後に教科書を読む群(復習群)の3つの群に参加者を分け、4日間授業を行いました。教師による解説授業は3つの群で同じでした。

実験の結果、予習をした2群は、復習をした群に比べ、歴史の背景因果を問うテストにおいて高い成績を示し、予習が歴史の背景因果の理解を促進することが示されました。しかも、そのような予習の効果は意味理解志向の高い学習者ほど大きく、意味理解志向の低い学習者には見られないことが示されました。また、授業中に生徒が書き込んだメモ量に注目して分析を行った結果、予習が授業理解に与える影響とその個人差は、授業中のメモ量を媒介して生起していることが示されました。

謝 辞

論文執筆にあたり、指導教官である市川伸一先生には丁寧なご指導をいただいただけでなく、心理学と教育実践を結ぶ研究者としてあるべき姿を学ばせていただきました。また、分析についてご助言くださった南風原朝和先生、的確で有益なコメントをくださった査読者の先生方、認知カウンセリング研究会の皆様、市川研究室の皆様、市川研究室の皆様に感謝申し上げます。さらに、実験授業を実施するにあたりお手伝いいただいた皆様、日々の研究生活に彩りを与えてくれる院生控室の皆様、熱い議論を通して互いの研究を高め合ってきた若手動機づけ勉強会の皆様に、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

この賞に甘んじることなく、不器用なりに少しずつ研究を積み重ねていきたいと思っておりますので、今後ともご指導、ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。